九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『GOSICK』にみるGothic : 桜庭一樹のライトノベルに関する研究ノート

Martins, Rafael
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 修士課程一年

https://doi.org/10.15017/1903747

出版情報：九大日文. 29, pp.98-108, 2017-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『GOSICK』にみるGothic
――桜庭一樹のライトノベルに関する研究ノート――

MARTINS（マルチンス） Rafael（ラファエル）

一　背景と目的

現代日本の文化を考えるのなら、Cool Japan（クール・ジャパン）は無視できない現象の一つである。杉山知之はその現象について、以下のように語っている。

> 二一世紀に入ってからというもの、マンガやアニメをはじめとした日本のポップ・カルチャーが海外で高く評価され大人気である。現代日本の文化はクール（Cool＝カッコイイ）だ、と口を揃えたように言われている。そう、「クール・ジャパン」と呼ばれ、熱い視線を浴びているのだ。(1)

日本アニメは諸外国でも放送され、マンガもまた数多く翻訳されており、二〇〇三年に宮崎駿『千と千尋の神隠し』は第七五回アカデミー賞で長編アニメ映画賞を受賞した。なおかつ日本産のアニメ、マンガに対しての関心が高まることによって、外国産の日本風マンガ、アニメも人気が出るようになり(2)、クール・ジャパンは世界のポップカルチャーに浸透していった。

同様にクール・ジャパンの一部である「オタク文化」(3)の中で発展したのが「ライトノベル」である。大橋は「ライトノベルを次のように定義している。

> ライトノベルとは、中学生や高校生といった青年期の読者を対象とし、作中人物をマンガやアニメーションを想起させる「キャラクター」として構築したうえで、それに合わせたイラストを添えて刊行される小説である。(4)

一般的にライトノベルの嚆矢は「TRPG（テーブル・トーク・ロール・プレイング・ゲーム）」の世界観に基づいた水野良『ロードス島戦記』（角川スニーカー文庫）(5)、角川書店、一九八八年四月）と神坂一『スレイヤーズ』（富士見ファンタジア文庫）、富士見書房、一九九〇年一月）と見なされる。しかし、久米依子、新城カズマ、一柳廣孝らはそれ以前のジャンル小説（SF）や若者文学（ジュブナイル、ジュニア）との関係も指摘している(6)。一方、ライトノベルという名称が定着したのは一九九〇年代以降であり、流行したのは二〇〇〇年代である。谷川流『涼宮ハルヒ』シリーズ（角川スニーカー文庫）、角川書店）の人気をきっかけにライトノベルブームが起こり、オタク文化の中で注目を集めた。数年後、ライトノベルに対する文化研究的な関心も高まりを見せ、新城カズマ『ライトノベル「超」入門』、一柳廣孝、久米依子『ライトノベル研究序説』、『ライトノベル・スタディーズ』、波戸岡景太『ラノベのなかの現代日本――ポップ／ボッチ／ノスタルジ

ア』（講談社、二〇一三年六月）等の書籍も刊行された。

ライトノベルは小説でありながら、文芸というより、オタク文化の作品としてマンガと関連するもののように見なされている。しかし、ライトノベルと、いわゆる「一般小説」[7]とは全く関係ないというわけではなく、双方が密接に関わっている。例えば、一般小説やライトノベルがもう一方のレーベルにおいて再刊される場合もあり、ライトノベル出身の作者が一般小説に移行するのも珍しくない。こうした状況において、ライトノベルと一般小説の関係性を考慮することは、ライトノベル研究の一つの方法であると考えられる。本研究はその中でも、一般小説として再刊された桜庭一樹『GOSICK』シリーズを分析する。分析に当たっては「Gothic（以下ゴシック）」、「ライトノベル」、「オタク文化」の三つの課題に分別して取り組む予定だが、今回は「ゴシック」に関する内容を提示したい。

二　桜庭一樹

桜庭一樹は一九九六年から二〇〇二年にかけて、山田桜丸名義でゲームのノベライズ版やゲームのシナリオを著していた。一九九九年十二月には『AD2015　隔離都市　ロンリネス・ガーディアン』（ファミ通文庫、アスキー）で桜庭一樹名義でライトノベル作家としてデビューした。なお、二〇〇三年十二月には『GOSICK』（富士見ミステリー文庫）、富士見書房）を出版し、シリーズとして成功を収めた。さらに、『推定少女』（ファミ通文庫、エンターブレイン、二〇〇四年九月）や『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない A Lollypop or a Bullet』（富士見ミステリー文庫）、富士見書房、二〇〇四年十一月、以下、『砂糖菓子』）等も成功し、二〇〇五年九月に『少女には向かない職業』（ミステリ・フロンティア）、東京創元社）をはじめとして、ライトノベル以外のレーベル、一般小説も発表してきた。二〇〇七年には『赤朽葉家の伝説』（東京創元社、二〇〇六年十二月）で第六〇回日本推理作家協会賞の「長編及び連作短編集部門」を、『私の男』（文藝春秋、二〇〇七年十月）で第一三八回直木賞を受賞し、これを機に活動の主軸を一般文芸に移した。

そして、『推定少女』、『砂糖菓子』や『GOSICK』シリーズ等のライトノベル作品も、マンガ調のイラストを削除した一般小説として再刊されていった。小説のほかにも、二〇〇六年から二〇一二年にかけて桜庭一樹は日記全七巻を著した[8]。また、いくつかの作品ではメディアミックス[9]が行われた。『少女には向かない職業』は二〇〇六年五月にネット配信ドラマ化され、『伏　贋作・里見八犬伝』（文藝春秋、二〇一〇年十一月）は二〇一二年に劇場アニメ化とマンガ化が行われた。『赤×ピンク』（エンターブレイン、二〇〇三年一月）と『私の男』は二〇一四年に実写映画化され、『砂糖菓子』、『青年のための読書クラブ』（新潮社、二〇〇七年六月）と『荒野の恋』シリーズ（エンターブレイン）は二〇〇九年から二〇一三年にかけてマンガ化された。

三『GOSICK』シリーズ

『GOSICK』シリーズは一九二四年のソヴュールというヨーロッパの架空の王国を舞台とした探偵物語であり、主人公は謎に包まれた寄宿学校に通う久城一弥とヴィクトリカである。日本人留学生である久城は、黒髪であるという特徴等から、学園に伝わる怪談の一つである「春に来る死神」と呼ばれることになる。常に「ゴスロリ」（Gothic Lolita）（後に詳しく述べる）の格好をして図書館に籠る、人形とよく見間違えられるほどの美少女であるヴィクトリカは、怪談に出てくる「金色の妖精」と呼ばれており、灰色狼の天才といわれる血族の末裔である。シャーロック・ホームズとワトソン博士のようなコンビであるヴィクトリカと久城が、解決不能や超自然に見える謎[10]を解いていくというのが『GOSICK』シリーズの大まかな流れとなっている。やがて二人の冒険はヴィクトリカの両親の秘密を明らかにするという方向に向かい、父であるブロワ侯爵は「オカルト省」での要職につき、娘を来たる大戦の武器として用いるために、彼女を幼いころから書物とともに閉じこめ育てていたと分かる。さらに、「オカルト省」の目的は大戦をきっかけにソヴュールの支配権を奪うことであり、王の相談役でもある「科学アカデミー」のジュピター・ロジェと争う。そして、その両者の野望を阻もうとする側に、ヴィクトリカと久城、またヴィクトリカの母・コルデリアとその親友であるブライアン・ロスコーがいる。

『GOSICK』シリーズは二〇〇三年十二月から二〇〇七年七月まで富士見ミステリー文庫のレーベルによって武田日向イラストのライトノベルとして長編小説全六巻、短編小説集全三巻が刊行された。また二〇〇九年九月から角川文庫で挿絵を削除し、カズモトトモミによる新しいカバーを付けた一般小説として再刊された。その後、同出版社からは二〇一一年七月までに書き下ろし長編小説全三巻（『VIII』と『VII　上下』）と短編小説集一巻が発刊され、ライトノベル版は角川ビーンズ文庫のレーベルで新たに再刊された[11]。さらに、二〇一三年十二月から現在にかけて、一般小説である新シリーズ計四巻が刊行されている。

小説に限らず、『GOSICK』シリーズはメディアミックスも果たしており、二〇〇六年と二〇一一年にはドラマCD化された。天乃咲哉によるマンガ版は富士見書房の『月刊ドラゴンエイジ』で二〇〇八年一月から二〇一二年五月にかけて連載され、単行本全八巻に収録された。二〇一一年四月には守姫武士によるもう一つのマンガシリーズ『GOSICK W』が角川書店の『月刊コンプエース』で連載されたが、こちらは単行本化されていない。前者はいくつかのエピソードを除き、ライトノベルの長編四巻と短編集の第三巻までのコミカライズとなっており、後者はコメディータッチによるオリジナルの内容となっている。

なお二〇一一年一月から七月にかけてアニメ版が放送され、『GOSICK』シリーズの知名度は一気に高まることとなり、それをきっかけに、メディアミックスはさらに広がりを見せた。アニメの放送と同時に、ドラマCD、マンガ、小説に加え、ソーシャルゲーム『GOSICK　退屈姫の迷宮』がGREEから配信され、MMORPG『Master of Epic ―― The ResonanceAge

Unverse ――』と共同企画を行った。翌年には、またオンラインゲーム『トイ・ウォーズ』や『テイルズウィーバー』との共同企画において『GOSICK』の登場人物がゲームに用いられた。

後に詳しく述べるように『GOSICK』はゴシックをモチーフにしている。そのため、本稿ではまずゴシックの定義と発展、主題と象徴について論じたい。

四 ゴシックについての先行研究

a 定義と発展

欧州で生じたゴシックは、建築と芸術の両方を示すが、本稿においては文学上の流派を意味する。ゴシックは Goths（ゴート人）というゲルマン民族からの派生語であるとはいえ、「ゴート人は実際にゴシック様式のカテドラルは一軒も建てておらず、ゴシック文学も書いてない」[12]。ゴシックという言葉の意味は時代ごとに変遷していくが、一八世紀の英国の浪漫主義期に、文学ジャンルとして定着した。また啓蒙主義の観点からは、ゴシックは古典的なものに対して、未開・乱雑（装飾の過剰）・非合理的であるという特徴を持ち、近代的なものに対しては、粗野・旧式・異教徒的だと評価された[13]。浪漫主義のゴシックには政治的傾向、心理的傾向、諷刺的な姿勢等の表現があり[14]、中世の神話や悪夢を利用し、その中世における暴政を、閉所恐怖を強調する城、修道院、地下牢（dungeon）、迷路等で表現する[15]。

一方、ヴィクトリア朝のゴシックは退廃（デカダンス）時代と呼ばれ、社会や主体の破壊、多様性、非人間性というテーマが多く、舞台は「迷路的な街路、貧民窟、アヘン窟、不潔で悪臭のあるスラム街にな」る[16]。Smith はヴィクトリア朝における文学作品、新聞記事、医者による記録を通じて、男性性を中心に、性、性感染症、階級、都市に対するゴシックの退廃を指摘している[17]。

さらに、二十世紀にホラー映画をはじめとして、小説、漫画、ゲーム、音楽、ファッション、サブカルチャー等へ、ゴシックは浸透していった。二十世紀の戦争を経てゴシックの主な恐怖の対象は武器、ウイルス、核黙示録へと移った。また、同世紀にゴシック的手法は世界へ広がり、Byron が「グローバル・ゴシック」(Global Gothic) と呼ぶ現在のゴシックに発展してきた[18]。

b 主題と象徴

Punter and Byron は幽霊城、怪物（Monster）、吸血鬼、迫害やパラノイア、女性によるゴシック、不気味、虐待、幻覚物資や麻薬等のゴシックの主題を紹介し、以下のように解釈している[19]。

①「城」は一般的に投獄の場所であり、古代、無意識、抑圧等の象徴である。

②「怪物」は非人間、創造物、または侵入や奴隷を象徴したが、近現代ゴシックでは、「怪物」は恐怖や否認よりむしろ、同情や共感の対象としても表現される。

③「吸血鬼」は違反、貴族、性欲、反キリスト教等に関わる。

④「迫害やパラノイア」は自己破壊は精神障害に関連する。

⑤「女性によるゴシック」には女性の主人公は投獄と抑圧の犠

性（囚われの処女）であって、ジェンダーに関するアイデンティティの問題が中心となる。

⑥「不気味さ」はフロイトの「不気味なもの（Unheimliche）」[20]という概念を参考にして、ゴシック文学で反復、運命、アニミズム、擬人化、自動現象、不明な性、早すぎた埋葬、無音、死等で例えられる。

⑦「虐待」も、城と同様、社会抑圧と密接に関わっている。

⑧「幻覚物資や麻薬」は無意識による世界の知覚、あるいは信用できない語り手と関係がある。

さらに、Praz は上記の「城」に加え、「人造人間（Homunculus）」、「迷路」、「ダブル（Doppleganger）」[21]、「囚われの処女」等の一八世紀末と一九世紀のゴシックに満ち溢れていたテーマは、二〇世紀の文学（ホラーやファンタジー）のモチーフになっていると述べている[22]。また、一八世紀では「美しい恐怖」[23]、「欲望の一部である痛み」[24]という感情が発展したのをきっかけに、ゴシックが定着したと示す。

c 日本のゴシック

Inouye は啓蒙主義に抵抗する近代西洋の産物であるゴシックを「クラシカル・ゴシック（Classical Gothic）」と呼び、それと異なるもうひとつの概念としての「パンゴシック（Pangothic）」を提唱した[25]。クラシカル・ゴシックは近代化する明治時代の日本に輸入されたものであるが、パンゴシックは「進化を続けていく美的価値」[26]と定義付けられている。つまり、これは英国で生じたゴシックと関わりがなくとも、同じように恐怖を中心にする文化要素を指しているのである。

この概念をもって、Inouye は日本の妖怪をゴシック的な存在として考え、平安時代の『源氏物語』（一〇〇八年）、鳥山石燕の『画図百鬼夜行』（一七七六年）、上田秋成の『雨月物語』（一七七六年）、小林清親、泉鏡花、水木しげるの作品、大友克洋の『AKIRA』（一九八八年）、押井守の『攻殻機動隊』（一九九五年）、宮崎駿の『千と千尋の神隠し』（二〇〇一年）等も日本独自のゴシックとして論じている。Inouye によると、日本のゴシックの特徴は「二価の両面性（bivalent ambiguity）にあり、それは「同じ存在や現象は、見なされ方や扱われ方によって変容する」[27]ものであるとされている。また、Inouye はその定義を用いて、『千と千尋の神隠し』の湯婆婆と銭婆や、『AKIRA』の鉄雄における善悪という二価の両面性も指摘している。

それに加え、日本におけるゴシックについて高原英理は次のように述べている。

> リテラリーゴシック：ゴシックロマンス・ゴシック小説それ自体ではない。およそ一九八〇年代から音楽映像ファッションそして文学として広がってきたゴシックという発想を、ここに新しい現代日本文学のあり方の一つとしても提案してみようというのである。[28]

一九八〇年代から日本で発展してきた日本のゴシックにおいては、本稿でも前述した「ゴスロリ」が、代表的な事例として挙

げられる。この用語は、Gothic/Goth と Lolita の複合語であり、「中世、ロココ、ヴィクトリア時代を浪漫的に空想、当時の復活に見える服装を着て、それらのヨーロッパの豪華な時代の貴族のような格好をする」[29]女性を指している。また、これは女性ファッション・サブカルチャーである一方で、オタク文化の中で萌えを表すキャラ・タイプでもある。[30]

五『GOSICK』と Gothic

『GOSICK』というタイトルは、ゴシックと同音異義語であることや、ヴィクトリカという名前がヴィクトリア朝を連想させる発音であること。また、彼女の服装が常にゴスロリであることなどから、シリーズにおいてヴィクトリア朝のゴシックをモチーフにしているのは明白である。『桜庭一樹日記　Black and White』で、作者は編集者との打ち合わせにおいて、『GOSICK』のモチーフを決めた瞬間を次のように述べている。

> K藤「舞台はヴィクトリア時代でヒロインはとても小柄。なおかつホームズ的ななにかもある。」[31]

『GOSICK』の物語の時代設定は一九二四年であり、ヴィクトリア時代の後となっている。ここから、桜庭一樹の言っているヴィクトリア時代は、ヴィクトリア女王の治世そのものではなく、架空の文化を指しているのではないかと思われる。また、『GOSICK』シリーズとゴシックの関係は、作品自体のジャンルにも見受けられる。文学史上の分類としての推理小説自体は、ヴィクトリア朝のゴシックで発展したミステリーやホラーに由来している。そのうえ、『GOSICK』シリーズには、美術史的なゴシックのテーマもまた散見される。

a 科学 対 オカルト

『GOSICK』シリーズ物語の中心には、ジュピター・ロジェの「科学アカデミー」と、ブロワ侯爵の「オカルト省」の抗争がある。その争いはゴシックにおける、近代を代表する「科学、合理性、文化」と、「迷信（オカルト）、不合理、粗野、旧式、異教徒」との対立関係に重なるといえる。どちらかを選ぶという問題ではなく、対立関係そのものを表現しているのである。

ヴィクトリカの非凡な推理能力も、ブライアンの奇術も、リヴァイアサンの錬金術も、一見魔術のようでありながら非常に合理的な論理や形式を備えており、科学とオカルトの両面性を持っているとも読み取れる。それは、Inouye が定義する二価の両面性[32]の一種ともいえるのではないだろうか。

一方、第一巻に現れる占い師ロクサーヌ、第二巻に現れる占い師セルジウス、そしてゴーストストーリーを信じるアブリルとセシル先生は、迷信の価値観を肯定する。ゴーストストーリーはすべてヴィクトリカによって合理的に解説されるが、ともに的中する占いの結果については一切触れられていない。さらに、第八巻でオカルト省は争いに勝ち、ブロワ侯爵が権力を手

に入れるが、最終的にコルデリアに破れて失墜する。

科学対オカルトに限らず、ブロワ侯爵、ルパート陛下等の邪悪な行動は貴族への不安、または貴族の退廃を象徴している。前者はコルデリアを誘拐し、強姦し、生まれた子から引き離してその子を幽閉し、武器として育ててきており、後者は嫉妬で王妃を殺し、自分の罪を隠して生きてきた、残忍で利己的な人物である。無論、現代作品である『GOSICK』シリーズにおいて、ヴィクトリア朝のゴシックにおける貴族への批判を表現する意図はなく、テーマとしてだけ借用していると思われる。

b 人間 対 獣

ゴシックで人間を獣と例えるのは、その人の人間性を否定し、野性的なものであるとする意味がある。ゆえに、犯罪者が獣のような外観を持つのは珍しくない。『GOSICK』シリーズでは灰色狼という血族の子孫であるヴィクトリカ、コルデリア、ブライアン等の登場人物たちは、獣や動物と呼ばれ、人間性を否定される。『GOSICKs IV』（二〇一一年五月）のある場面でヴィクトリカは兄のグレヴィールによるいじめについて、「愛を知らないだの、冷血動物だの、四角い箱だのとわたしをいじめて」[33]と嘆く。しかし、ヴィクトリカを獣のように見なすのはいじめか差別の表現に限らず、語り手も一度ならずヴィクトリカの行動を動物に例えており、『GOSICKs IV』の同話でヴィクトリカの鳴き声を「悲しげな、獣の咆哮がもれでた」[34]ようなものと描写している。

それに加え、久城一弥は作中で度々栗鼠に例えられており、『GOSICKs IV』でコルデリアは梟の声の真似をし、さらに『GOSICK VIII』（二〇一一年）ではヴィクトリカの存在が蝶として象徴される場面もある。[35]ゴシックにおける野生や恐怖を象徴する動物に対して、この栗鼠、梟、蝶は対象的に可愛らしさや純粋さを表していると見受けられる。

c 分身（ダブル）やアイデンティティの分裂

『GOSICK』シリーズの登場人物たちは獣と呼ばれ、人間性を否定されているのに加え、アイデンティティの分裂を象徴するダブルの表現も多い。例えば、ヴィクトリカは母のコルデリアとそっくりであり、二人は繰り返し見間違えられる。そして、二人ともよく人形に見間違えられる。人形は「ドリアングレイの肖像画」のように人間の形をしている非人間的な物であり、人形に見間違えられるヴィクトリカとコルデリアは、人間としてのアイデンティティが不安定な存在として表現され、人間性が象徴的に否定されるといえるのではないだろうか。

また、奇術師のブライアン・ロスコーは一人の人格を共有する双子であり、ブロワ侯爵の部下である双子の老姉妹と同様、明確な「分身」をもつ人物である。ブライアンの場合は二人で一人のアイデンティティを持ち、『GOSICK VIII』で片方が死んでしまうと、もう片方も衰弱死してしまう。ブライアンの二人も、双子の老姉妹も、その分身で人を騙す奇術のトリックを実行することで、その分裂はアイデンティティの問題に限らず、

「不気味なもの」としての性質を得るのである。

他にも、『GOSICKs　I』（二〇〇五年七月）で転校生であるアブリルが誘拐され、代わりに偽者である泥棒クィアランが通ってくるケースもある。この場合は一見すると、アイデンティティの分裂を示しているわけではなく、単に人をだます手段に過ぎないと思われる。しかし、アブリルとクィアランの見た目は同じでありながら、中身は対をなす存在であるという点で、善悪という二価の両面性が表現されているとも言えるだろう。

d 囚われの処女

ヴィクトリカは自由に学園を出入りできず、父のブロワ侯爵の命令で「囚われの処女」としての生活を送る。幼いころからブロワ城の石の塔に閉じこめられ、八才のころ聖マルグリット学園に引っ越したが、授業を受けず、「菓子の家」か「図書館の塔」に籠ることになる。そうした幼年時代のため、ヴィクトリカは人と交流もせずに成長した。また、父にとって武器であるヴィクトリカはブロワ侯爵の都合で「ベルゼブブ頭蓋」という修道院（第五巻）、「ファントマ」という劇場（第七巻）、そして「黒い太陽」という監獄（第八巻）に移動させられる。そのたび、久城はヴィクトリカを救いに行く「騎士」の役を果たす。[36]

さらに、七巻で語られる通り、十年前、コルデリア自身も侯爵により塔に囚われていた。その際、強姦され、ヴィクトリカを産んだ後、ブライアンに救われた。つまり、「囚われの処女」であるコルデリアにとって、ブライアンは「騎士」となる。

なおかつ、ゴシックの「囚われの処女」は一般的に、迷路的な城等に閉じ込められるものであるが、ヴィクトリカの籠る「菓子の家」は迷路花壇の中央にあり、図書館の部屋もまた迷路階段の上端にある。しかも、ゴシックにおける迷路に迷う「囚われの処女」と違い、ヴィクトリカの場合はその聡明さから、迷路は自分を迷わせるものではなく、他人を近づかせないための手段として存在する。言い換えれば、ヴィクトリカは迷路に迷う主体というより、迷路に守られている宝物といえるだろう。

e ゴーストストーリー

ゴーストストーリーへの関心は、ゴシック文学においては恐怖に対して美的価値が見出されるようになったのを契機に高まりを見せた。『GOSICK』シリーズにおける聖マルグリット学園は、ゴーストストーリーに溢れている。アブリルは特に怪談に興味を持っており、いつも怖い話で久城を驚かせようとしている。さらに、既出の通り、久城は「春来たる死神」と呼ばれており、同じようにヴィクトリカも「金色の妖精」と呼ばれているが、それらは学園内の怪談から生じたものである。

怪談好きなアブリルに対して、ヴィクトリカは怪談を一つずつ解決して、ゴースト等の超自然的存在を否定する。各話で、超自然としか思えない出来事をヴィクトリカは合理的に説明していく。例えば、第一巻で「Queen Berry 号」という船の中で主人公たちが一旦部屋を出て戻ると、そこは難破船のような見た目になっていた。そこで、主人公たちは「Queen Berry 号」

が幽霊船だと思いこんでしまう。しかし、ヴィクトリカはその部屋が自分たちを驚かせるために準備されたものだと推理する。また第七巻では、王妃の首なし死体が密室で見つかり、同時にその首が離れた場所で発見されるという奇妙な暗殺事件が起こるが、ヴィクトリカは暗殺者は王自身で、死体の首は王妃のではなく、彼女と瓜二つの行方不明になった踊り子のものであると推理する。なお、第四巻ではリバイアサンの錬金術、『GOSICKs II』（二〇〇六年五月）ではアブリルの前に現れた幽霊等も、全てヴィクトリカによって合理的に説明される。

ゴシック文学はゴーストストリーへの関心が高まった契機である一方で、超自然と思われる事件を合理的に推理する「探偵小説」もまた、ゴシックの中で生じたのである。

六 はたして『GOSICK』は Gothic なのか

本稿では『GOSICK』におけるゴシックの要素を指摘してきたが、現代の日本におけるライトノベルとしての『GOSICK』を、ゴシックの作品と考えるのはふさわしいかという疑問は残る。一方、桜庭一樹は浪漫主義的ゴシックやヴィクトリア朝ゴシックのテーマと象徴を借用して、探偵物語を書いているといえるが、そのゴシックは日本で解釈される欧州のゴシックなのではないだろうか。ヴィクトリカの服装はヴィクトリア朝の服装そのものではなく、ゴスロリのファッションである。例えば、『GOSICKs II』のライトノベル版の挿絵には『不思議の国のアリス』をモデルとしているものがあるが、ゴスロリのファッションでも『不思議の国のアリス』のモチーフは人気が高い。ビジュアルに限らず、第一巻の冒頭は『不思議の国のアリス』、第三巻の冒頭は『鏡の国のアリス』からの引用である。また、他の冒頭は『白雪姫』、『ラプンツェル』、『人魚姫』、『ヘンゼルとグレーテル』、『秘密の花園』を含め、全て児童文学からの引用である。つまり、ヴィクトリカのゴスロリの格好のように、『GOSICK』にみるゴシックは現代日本に流行する欧州の過去の空想だといえる。

それに加え、Inouye のパンゴシックと Byron のグローバル・ゴシックの概念を用いると、イギリスで生じたゴシックとの関係の有無に関らず、それと似た要素を持つ日本の恐怖に関する空想の世界も、あるいは二〇世紀以降のゴシックの発展（映画、音楽、ファッション、漫画等）の影響を受けた作品もゴシックとして考えることができる。ゆえに、『GOSICK』シリーズもまたゴシックの作品であると位置づけることも可能であると思われる。しかし、このゴシックは本来的なゴシックではなく、現代の空想に存在するゴシックだということは、決して無視できない事実であろう。

【注記】

1　杉山知之『クール・ジャパン：世界が買いたがる日本』祥伝社、二〇〇六年二月、三頁

2　例としてアメリカのアニメ『アバター　伝説の少年アン』（製作　ニコ

ロデオン・アニメーションスタジオ、エグゼクティブ・プロデューサー マイケル・ダンテ・ディマーティノ、ブライアン・コニーツコ 二〇〇五年二月～二〇〇八年七月）、ブラジルのマンガ『Holy Avenger』（原作 カサロ・マルセロ、漫画 アワノ・エリカ、出版 Trama Editoral（後、Talismã）、一九九九年八月～二〇〇三年十二月）。

3 ここでのオタク文化は、マンガ、アニメ、ゲーム等を含める若者向けの日本のポップカルチャーの一つの媒体を指す。

4 一柳廣孝、久米依子編『ライトノベル・スタディーズ』（青弓社、二〇一三年十月）一八頁

5 本稿では、「〔 〕」はレーベルを表している。

6 久米依子「第一四章 ライトノベルとジェンダー――少年少女の出会いとその陥穽」（『「少女小説」の生成 ジェンダー・ポリティクスの世紀』、青弓社、二〇一三年六月、三一五～三一六頁）、新城カズマ『ライトノベル「超」入門』（ソフトバンククリエイティブ、二〇〇六年四月、二三～二四頁）、一柳廣孝「はじめに」（一柳廣孝、久米依子編著『ライトノベル研究序説』青弓社、二〇〇九年四月、一四頁）

7 ライトノベル研究で、「一般小説」というのは純文学や大衆文学を問わず、「非ライトノベル」（新城カズマ、『ライトノベル「超」入門』、七九頁）のレーベルから出版された書物を指す。

8 桜庭一樹による日記は、元々二〇〇四年九月から二〇〇五年十二月にかけて桜庭一樹のサイトで Web 日記として書かれ、二〇〇六年三月に富士見書房によって『桜庭一樹日記 BLACK AND WHITE』として刊行された。二〇〇六年三月からは「Web ミステリーズ!」というサイトで読書日記を書き、これは東京創元社出版で単行本化もされた。

9 「メディアミックス」とは、新聞、テレビ、週刊誌等の複数の媒体で同時に宣伝することによって認知度を高める手法（川崎拓人、飯倉義之「ラノベキャラは多重作品世界の夢を見るか?」一柳廣孝、久米依子『ライトノベル研究序説』、一八頁）

10 『GOSICK』長編小説シリーズのミステリーはほとんどが殺人事件であるが、『GOSICKs』という短編小説シリーズには殺人事件に加え、ゴーストストーリーも含まれている。

11 詳細は山口直彦「春来る死神は幾度もやってくる――桜庭一樹『GOSICK』の復活劇」（『ライトノベル・スタディーズ』、一五七～一七三頁）を参照に。

12 Chris Baldick（1993）"Introduction" in The Oxford Book of Gothic Tales. Oxford: Oxford University Press, p. xii.

13 David Punter and Glennis Byron（2009）The Gothic. Malden: Blackwell. 7th edition, pp. 7-8

14 Punter and Byron（2009）pp. 13-25

15 Baldick（1993）p. xix-xx

16 Punter and Byron（2004）pp. 21-22

17 Andrew Smith（2004）Victorian Demons - Medicine, Masculinity and the Gothic at the fin-de-siècle. Manchester: Manchester University Press.

18 Punter and Byron（2004）pp. 259-297

19 Glennis Byron（2012）"Global Gothic" in David Punter（ed）A New Companion to the Gothic. Malden: Wiley-Blackwell, pp. 369-378.

20 フロイトの定義は、以下の通りである。（ジークムント・フロイト、藤野寛訳「不気味なもの」『フロイト全集17』岩波書店、二〇〇六年十一月）

秘密に隠されたままにとどまっているべきなのに現れ出てしまったものは、どれもすべて不気味だというのである。（一四頁）

空想と現実とのあいだの限界が消し去られるとき、われわれがそれまで空想上のことに過ぎないと見なされていた出来事が現実にわれわれの前に出現してきたような場合、また、ある象徴が、象徴されているものの動きと意味を完全に引き受け代行するような場合には、それらの事態はしばしば、そして容易に不気味な印象を与えるのである。（四〇頁）

21 ダブルは一般的にアイデンティティの分裂の象徴であり、そっくりな顔をしている二つの人物を指す。しかし、これに限らず、ヴィクトリア朝のゴシックの中でアイデンティティの分裂の例として『ドリアン・グレイの肖像』（一八九〇年七月）と『ジキル博士とハイド氏』（一八八六年一月）が挙げられる。前者の場合、ドリアンのアイデンティティは肖像画に分裂し、肖像画はドリアンの代わりに年を取る。後者の場合、ジキル博士はアイデンティティが分裂し、二重人格のような人物になる。

22 Mario Praz（1968）"Introductory Essay" in Peter Fairclough（ed）Three Gothic Novels. London: Penguin Books, pp. 7-34.

23 Praz（1968）p.10

24 Praz（1968）p.11

25 Charles Shirō Inouye（2012）"Japanese Gothic" in David Punter（ed）A New Companion to the Gothic. Malden: Wiley-Blackwell, pp. 442-454.

26 Inouye（2012）p.443

27 Inouye（2012）p.444

28 高原英理編『リテラリーゴシック・イン・ジャパン――文学的ゴシック作品選』筑摩書房、一九九四年、一一～一二頁

29 Onohara, Noriko（2009）"Romantic European Nostalgia: Japanese 'Gosurori' Fashion" in Inter-disciplinary, p. 6〈https://www.inter-disciplinary.net/wp-content/uploads/2009/08/onharapaper.pdf〉（最終閲覧日：二〇一七年一月三〇日）

30 新城カズマ『ライトノベル「超」入門』一四九頁

31 桜庭一樹『桜庭一樹日記　Black and White』富士見書房、二〇〇六年三月、一五六頁）

32 Inouye が挙げた二価の両面性の例に最も当てはまる登場人物は、ブライアン・ロスコーである。シリーズの全体を通して敵か味方か分からないキャラクターであり、最後までヴィクトリカを憎しみながらも、コルデリアの命令に従い、彼女の命を救って死ぬこととなる。

33 桜庭一樹『GOSICKs IV』、八四頁

34 桜庭一樹『GOSICKs IV』、八一頁

35 久城は帰国させられる場面でヴィクトリカに別れの手紙と一緒に金色蝶を残す。その蝶は長い間ヴィクトリカのそばにいるが、クライマックスシーンでヴィクトリカの金色の髪が銀色になっていたことが明らかになったとき、戦場へと赴いていた久城はそこでヴィクトリカを象徴する銀色の蝶を目にする。

36 ただし、『GOSICK　VIII』で久城は帰国させられており、救いに来るのはコルデリアとブライアンである。

※　本稿における英文からの引用は全て引用者訳となる。

（九州大学大学院地球社会統合科学府修士課程一年）